

古今集遠鏡

三

卷第七

賀

歌

七丁

卷第八

離

安

七丁

卷第九

霸

旅

十九丁

卷第十

物
画

谷

十四丁



古今和歌集卷第七巻後

賀歌

歌一うら

よみ人あしど

永君ハふそりハふそふさるるのいふふとゆりて若れむを

○コニカイ石ガ大キナ岩ホニナツテ苔ノハエルニテ千年モ万年モ

ハ繁昌テオイデナサニコトノ君ハ

海ノ淡ク砂ノ粒ラダテニカワテ君ノ長寿ノ心年ノ救取ニセウ

○海ノ淡ク砂ノ粒ラダテニカワテ君ノ長寿ノ心年ノ救取ニセウ

ふやの山ささぎの破よまむひふも君がは代をバハふそととわく

○シホノ山ササギノ破ニ住テ井ル鳥ノ鳴ヲキケバ君ノ心代ヲヤチユクトサ鳴キマス

コがよひいふがやちよふとるしとてくもめおきてはらひゆりせよ

○ワレが長命十ヨハヒヲソコモトへ進せウホドニコレカラソコモト八千世ノヨハヒノ上へハワレが齡モトリソテソコモトニメカレ多キラバ後ニ思ヒダシグサニシテおラガクヨロモヒダサツシヤレ 折々もろろ一解材もろろ一

に和洋の傍心遍照小七十の契縁ひるす時の清き

かぐつとふもかぐつとぬぐつとて天が八よ代小つよよもぐぬ

○朕モドワレテナリ共ニ長命テ居テい夜ノトホリニ又イクタビニク一賀ヲイハウテ進ジノソコノ八千乗ノ契ニドウソ逢ウヤウニシタイノカーニ和のみをばみふおろ一ゆ一はるあふををを乃八十の契一もろろひばはらるるもろろひばはらるる

かの世をばふりてくをふ 偽正遍照

清をくゆ祖母あふ一おの假字を去べきん

ちりやぬす神のきるまきむほくくくに子年の毎もらえぬべらぬり

○ハ杖ハ一トホリノ物トハヒエヌ大カタ神ノ心キリナサタ杖デアラウ 松レバ

此杖ヲツクカラシテハ千年ノ恆ニテモ心ヤスウ越ラルデアラウト也也

ほり門のおひまうらぎきののりち契九條乃家おや

一けつあふとをる 左系業平おや

楊をらりかひるもおひくくぬきくひるある道ちがふけい

○四十二匹ナリナサレタバ 初老トナシテコレカラ老カコウト云チヤガドウソコヌヤウニシタイモノナレバソノ老メガ来ルをラフニテヨウヤウニ用ニ三・楊をヨ

タシトナリアウテソコラガ野ウ曇ルヤウニセイソシタラソデ道ガ野ウテ
赤丸光ガフニヨウテモホトニガふハ万葉小多キ宛疑ハのかよハワ
ウビと流のみこばをばのよとぢの如きを大井とて
一きとる日とあり
きのこれとる

いとむも祖母とておをうとてし

か光のを此心のいもいととてたる流乃とてちよは教うと

○は大井ノ近所ナ亀ノヲノ山ノ岩ノ子ニソウテオチル流ノ白玉ノ多イ教ハ
内寿今ノ千年ノ教カヤレ 山ノ名サヘメテタイ亀山ナレヤ

さごやらのこまのきこさいのまは五十は笑ふとよつり
らる流風小橋の花はちとてふ人の花はくるとか

かきふはとを流

流系真風

いづふさ流月日ハありて花をてくもをどをくもき

○ナニ氏ナシタゞるニイク月日ハ多イヤラスクナイヤラ 何氏也ハズニウかくト
シテクラスガ けヤリニ面白イ花ヲ忍テクラス春ハサキツウ日教カスクナウ思

ハル、竹材小多をそく形きふおどらきとて人むとふ一月日ハ
多うりらとて始めておがゆるさるふとていふハうねり

みややもはみこは七十の髪乃らう一流の屏風
よみかくかきり流 きこの流ゆき

まろとばをふさぐさく梅のを天がふ年のあざいとてさ
○まがクバは心をへツバニサク梅の花ヲ君ガ千年一テノまノ

此カガシヤトサなジマスル

素性法師

い中一人よりのきわむばをや〜子ども子孫のあはし君不始りき

○千年モイキタ人ハ昔ヒアツタカナカツタカハヒラスケレ厄トヒ今ニテニ

ハサウス人ハナイモセヨ千年イキルタメレヲ君カラハ始メサレテアラウ

廻して思ひおきてしめぞや万代ハ津をきり〜むじが天のくあ

○吾君ハ百年ノ教ヲドウゾ万年ニテモト寐テモオキテモ我ヒマスルコト

ハ人ノカニコソ及バズ凡神ガサモ通りニハカラヒサレウワサ 家君ノタメニ

神ぞあ〜しむち万葉小邦〜あ〜さむらでわるお小てあ〜とハ

そ〜〜ひをこおよそり〜と〜つ〜ひおひち〜あ〜のまのひふハあ〜び

夜原ニ善ガ六十等ふみりる 左原ニげを原

はるかきもふ年れ〜ち〜あ〜おふあぬゆよ海うせと〜と〜む

○鶴亀八千年ノヨハヒラタモツ物トドソレモノ千年ノ後ハドウアル

ヤラシラスガ ぎんハ千年ゴザツテモマダソレデハ十分ニハなせ子ハ其

ウヘモタ存分ニセウスレハ無事デオキマセウ

此方ハ何〜人左原と記をるがと〜といふ

う〜みよのつねおりがよ〜と〜らのあふむと〜えり

あ〜り〜しよみゆり〜 ぎんち〜し

万代をす門〜を君成〜ひつ〜と〜年の陰ふと〜むと〜思ふ

○君八万年ノハ壽命ヲ待ツナバソノニツト云名ノ松デサオイハヒヤシ

ニスルサウシテツノ千年モアル松ノカゲニ鶴ノスムヤウニワタシモ君ノ
千年ノオカゲヲ蒙リテ共ニ長ウ居ニセウト存ジニスレバサ

御持小はるしつ小鶴をよせせりといひりまふ
下白ねを鶴ふよねとすいり

たのしむみみ右文の右系物片の口十笑一りり
めふは季の急うけしるの屏風ふあさりりりり

吾日せふりあはみつゝ兼代をいふらるを非をあらむ

○山嶺ノタメニカウ春日野テ新葉ラツシク心内テハ壽命ヲ万年
マデトオイハヒトス心教ノホドハハ先祖此春日ノ山神ガサハ納受テ
サレテ山守リナサルテゴザラウ あらむのまじりていふがじし

山さみみせぬふらるるをあらぬのゆきてをぬりぞらき

○高い山デキモノアタリニ見エルアノ樞をガキツウヨイ花ヤガ
山ガ高サニドウモアソコハエイカ子バア、ドウヅ一折テキタイお
チヤト思ウ心ガ 毎日アノ山ヘイテアノ樞ヲララヌ日ハサナイ

夏

あぶしにあはるるあふほどぎんてららのまをわびもあは

○イツノ年モ同じ声デナケバナニモメウラレイ声デハナイニアノ郭公オ
ホクノ年毎年サテモサテモアアアカヌカチおはるららの伝はし

秋

まみのそのねを枯れ吹くふらるらるるをきりあはる

○巨ノ江ノ松ヲ秋風ガサア、トフクトソノマ、ドオト信ノ暮ヲ
ウチソヘル

ふもろくくわやの川芳らぬいし山の木、葉も色まきりゆく
○佐保山ノ木葉モ色ガマサウチキタトホリナレバ今ヲデモウ 一 ハ
佐保川ノ方ガタツタサウナ ○秋ニモ葉の色もさうさうに
本葉の色づくおそろふがくよあり

秋ノ色も加へぬとにふもろくくわやの川芳らぬいし山の木、葉も色まきりゆく
○秋ニツテモ木ノ葉ノ色ノカラヌト云常磐山ヲヤニヨツテ ハ 山 ニ ハ 紫
ハ 山 ニ ハ 紫
ノナイニ ヨソノ山ノ木葉ヲ風ガ吹テ来テサ 此トキハ山へ借スワイ

冬

ふもろくくわやの川芳らぬいし山の木、葉も色まきりゆく
○冬ノ色も加へぬとにふもろくくわやの川芳らぬいし山の木、葉も色まきりゆく

○け吉中ノアタリトモカモ白ク雪ガフタ時六山ノ風デフモトハ花ガサアワイ
春宮様うまれよりあはれなりてふはわりてよめ

典侍藤原よるうはれなり

あはれなりてよめ
○春日神ノ由未ノ夜系氏ノ中デモは上モナイ由方ノ姫君ノ由腹ニ
テキマシサツタ若ク様ナレハ テウドソノ春日山ノ高ウウチハレテ
クモル由ノナイヤウニ由行未イツデモクモリナウ天下ヲ由照シアソバステ
アラウトなジラレニス

古今和歌集卷第八巻後

離別歌

秋の風

在東山平野

まよふ心は秋の風を思ふまじきうらみ今更りて心

○今此方ハ糸ヲ立テ別レテ因幡ニ下ルガニ云ノイナバ山ノ最ニハ
エテアル松ノ名トホリニソナガハ方ヲ待トタ多クヲキ文田テコウワサテ

よみ人あはれ

まよふ心は秋の風を思ふまじきうらみ今更りて心

○新立テ磁ヘユク人ニ 一 萩ノ原テアルは秋ノ野テ今ワカレルガ

オカヘリヲバイツト思ウテマダウヅソヤキツウモイローデアラウ

あすもがらぬの流るをが

かぎりなきをわかれよそふりかるとも人を思ふがきむやま

○今カウ別レテ限リモナイモイモヨリアチラフニハハイクヤガソレ

テモハ在久ノハ忘レルモナニ思ウテ行ウキヤヨツテ心内ド

コニテモイツシヨニダツテイクモヨシキヤワサ身コソカウニテ今別ルレ

心ノ内デハキ根タチヲアトヘ抄ニテオカウカイ心テハツダツテイクワ

サテ あす始白の流るし 鮎村よ

をのちあつたみちけくのをけにまかりし

そよけよ免

あすち終はあや乃すもとのとらひさるる心ばかり

○ソチタ身ノ守リキヤト出ウテ添テヤルハ母ガ心バカリヲハユクサキ
ノ実而クデモ ドウゾトノテトサルナ トホシテヤツテトサレ

さごと此のみはあうてぬぢうおきうお道
江のまけふすかりうおふうぬ乃をなむまし
此はふくゆるる きこのこきさじ

○今日別レテ明日ハキキニ又アハルホド近イ近江ふチヤトハ思ヘ
カハツタモノデ別レトイハ悲シイア、我ガイカウフケタヤラ 社ガ
あデヌレタワイ イヤクコレヤ後ヂヤワイ
あ〜〜あわりき〜〜ふよふみ〜〜は〜〜

う〜山あう〜ハキケド喜々然あちわう色形バ慈〜〜し

○おあニカヘル山ト云山ガアルト云一ナレバも名ノトホリニオツケルを
るデカヘラツシヤラウトハ思ヘドシテモアノ履ノ立テアル方ヘ立テ別
レテイカニヤツタナラバ慈シカラウ

人のうぬろもねむけおしよめ
きのほ〜ゆき

そ〜〜ひ〜〜たものごとくおぼ〜〜らねを後ハ何ぢらむ

○ナゴリヲシウ思ハダタツシヤラヌウチカラハヤハヤウニ慈シイ相ヲ
三 立テイカニヤツタアトデハドノヤウチコチガスルデアラウ

ともぢらね人のあ〜〜ふよを後

○一 内立チノ日ヲバ明日チヤトス一ハワシヤモウサエスマイ ワシラバ
ステハオイテ出サセルナバ明日出立チヤトサテハ 明日ノ朝ニサツ
タナラ ワシヤモウオノキエルヤウニアラウト存ジラレマスモノ

いふハウノ人ほくう紙もまらふとあゝーき
かよウタカ
あふつきて年人くまふる人をもさく
昨日なむいふとばかりいひつるあふもかひも
あふまふてはふりま
あふらふまかりらふとあふまらふらふはまふも
あふてつらうける 寝
あふらふあふらふきあふらふらふらふらふらふらふらふらふらふ

○毎日アハレル公利根チヤトハ礼マレヌ ミヅクサイ由心ナレバツレ
ユエワシヤ存ジ立ッテモ陸へトリテスル今度ノ旅デゴザリマス
きのひひさざうづまふかりきふふ人のあ
やどりしてあふらふきあふらふらふらふらふらふらふらふらふ
女のようにうづまらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふ
えぞあふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふ

○オマハワタシヲイッテモ忘レセヌトオウシヤルケレバ ワシハドウモツレハサ
エガテシセヌ 未デワシガ忘レルカ オマハガ忘レテトウテトサレヌカハ今下ガ
アツテイキテ居タナラ オウケ知レウホドニクシテゴラウジヨ ワシハオマへ
ライツ迄モ忘レハスマイガ オマハ追付私ヲバ忘レチサルテアラウワサ

あひらきしほくく人乃はづまのうく人まありらと
おらうとくしよえら ぬくやぶ

そわあもきふくろりのおくも祢バカかしく人よるもづりく
○そ極が今なドレホドまイホへイカレヤツテモ 拙者が心ハ
イツモツノキ極ノ方ハカヨウテ コニ沙ツテハ居子バヒツキヤウハカ
今別レテ路ニ沙ルトスラレルハカリヂヤ 心ハ別レハセヌ
友はあつて人まありらくはふよあ

ふきれそわくからくふまあまらばぬさくくく旅うぬ
○雲ノアチコチへ分レテイクヤウニ今なまきイるヲへダテ、別レ悲心ニ

よーまのむでとこの

今ハナムケニ進ズル此手向ノ麻ノコミカナヤウニ 拙者ハイロクニ心ヲ
クダイテ サテくナゴリラシイ四旅エテゴザルカナ 。ふ秋エぬさくく
こゆふきりて、候ふ入れて、道の程よよわけ料よ。 子色の緒をきと
旅うらくよ緒うすぬまざらどろくこれらり

みちのくまありらく人ふまみてつらく

ほくゆき

あしやれハキふくさわくさちあても思つ母人ふをなぞつね
○ハルカニ雲ノイクヘモダ、ツテアルアチラフふデアラウ氏 拙者ハキ極ノウ
ヲタエ思ウテ居ヤウホドニタトヒキハダテル氏 心ハハタテサツシヤルナヤ
人をわくれまはあふまらけ
こうれてふくハきふも何くふふふふふふふふふふ

○色コソ物ニシム物ナレ 別レトネーハ色デモナイニドウ云コトテハヤウニ
 心ニシムぐトツラウ思ハレルヤラ

何ひまきりきり人のこしはまにすかりて年へて
 系ふすうでまきり又人のこしはまにすかりて年へて

元何内解恒

かへる心形もどくありていつくしひを身てとて申しぬ名ふとてありれ
 ○そろろノ又トラツシヤル玉ニアルカハル山ト云ハヨクイタノカハルト云名チヤト思
 ウクニツノカハル山ハ 何ゾヤクニタツツグ サウ云山が有テモアルカヒナイ
 アルカヒト云ハ久ビブルデホテモ系ニ居トラスニ又アチカハルト云名テコソアレ
 こーのまへすかりきりくふすうてつうかーきり

トそふのこひやまていひゆは乃ゆきさるるべも何ぬお
 ○今カラハヨソニツカリ オナツカレウ思ウテ月日ヲタテテゴサラウガ
 アハウへ糸ツテ目ニカ、ラレウ思ハレヌワシガ身ナバサ ゆきさ
 又つとりては山乃ちをとるるといひうきさり
 おとは山乃ちをとるるといひうきさ
 つまゆき
 おとろい心あざかくほくほくきんあがみははねむべら
 ○オトハ山ノ言イホノ上テアレ朝公カウウ鳴マス 郎公モアフトホリ鳴
 テキ根ノ内列ヲナゴリヲ思フテアラウサウサエル 拙者ドモ、同じサ
 ぬらつておくちうぎが物につくひふおが月乃は

こもりのかきふまかりしうぶうのをのこどもさけぬ

うびがうつでふよめく　あつらふれのみあら

もねのふびつてどめよきるむぐら秋のあまは情くやあしぬ

○トモノぐニウテドウソオトナセキリグスヨ今秋ノ別レ時分ニオ

ワカレナスハコレホドナゴリヲレイニソチハナコリヲレウハナイカイ

年、月、日、時、分

秋考れものふましく、うぶをねむほしぬ思ひふこひや海む

○アノ考ノまヤウニキ根モ共ニ立テ出テイカヤツテ出別レトタナラワシ今

カラハアノ考ハレヌヤウニ心ガレズニイウモオナツカレウ思ウテタテルテゴザラウカイ

係る縁がほくく人ゆあみむしてほりきつあふや戸

かきつてしこわもきししきあるとりほりしじあ

あつらめ

いのらぶふふかきしああばらうりもろく抑しあまし

○今サへ心ニカセニナツテ死ナズニ居ラル、おナラニガサテ出ルレトガコホドニ

想ニカラウゾイ人ノ今ハら海ノ時分ニテイモ知ヌニヨツテサ想ニイワイノ

ふざねより汁まびのちりまをあたりに小人くすありて

うけりがてふしてこわもきししきあるとりほりしじあ

あつらめ

人ちのさけしあふふししきあるとりほりしじあ

○人ノサセル縁デナイ我心カライク縁チヤニタイガイナラナラモウイキ

トモナイト云テドレヤカヘラウツ

よはこもよりのあかり秘しきねがひのりり
みま

あつらひききあーん乃あかーいあきかてさぬいさもあききぞ

○ドコモデモイツヨニキタイトシタハレテコレもキタ心ニ着テアル我身チヤ

ニま心ガトコマテモきねニツキソウテ糸レバコレカラぬルトキニハハヤハ
心トハナレテ心ノナイヌケガラチヤニヨツテカハリナニハきモエリマセヌ

あきこもよをうらむきけきけふまありらあかあかりふ
お板きあゆまよみらる けいゆき

か月のそとふもゆらゆら板きふめあつらぬいさもあききぞ

○此坂ハ逢坂ナレバ人ニ色ウハズキヤニハ坂ヲコエツハソシテマア別レテ

イカワシヤル一カコレハ色坂ト云名ハ杉モシサウニサエテ杉ニナラ
ヌサ名チヤワイノコレガ人ダノメト云モノチヤ人ダノメトハ人ニ杉モシウ思
ハセテオイトソシテまをリデモナウテムダナラウヲ云ヒマス

○子秋云かりとハ色坂と云うる。かりと云ふはゆらゆらと

あつらひききあーん乃あかーいあきかてさぬいさもあききぞ
けいゆき

あつらひききあーん乃あかーいあきかてさぬいさもあききぞ

○半松ノトラツシヤルハ木ノ道ハ拙者ハ石素問ナレバ白山ハモトヨリ
一ノ一 惣持ノ石ノ源イ玉チヤト云一ナレバ半松ノトホウテイイカワシヤツ

タツノ雪ノ跡ヲタツ子テ拙者モアトカラ糸ラウ

人の花よりまじりてきしゆきりつうかかるとねむ
とちりつゆふよめ

傍心通所

夕も色はぢぢがきハムくそしあてよほとこえーとやどりごとく

○タカタノけをノガキハ 山トスエレハヨイニ サウシタナラ 花ハドウモ

山ハコエラレイト名ウテ アノイヌル人モ コヨヒハコトトマルヤウニ

ふーのをくしてうへりまじりてきしゆきりつうかかるとねむ
いてふよめ

幽仙法師

この色をば山の楊柳をてきしゆきりつうかかるとねむ

○サテカウ心めレキスハキツウ心掛念ナガト云テ拙者カナボオトメヤ

ニタトテトマリハナサルマイホドニ コレハナニデモ 山ノ楊ニウチカサテ

トメウ庄トメニイ庄アノ花シダイニ波サウワイ オクガタモヨモヤアノ

花ヲフリモギツテエカヘリハナサルマイワサテ

うつらんわんねみころ。舍利舎ふふのぢぢとくわき
ゆる様のむねふよめ

傍心通所

ふねまじり吹まじりみぢぢとくわきとふよめとくわきとくわきとくわき

○山風ニ此楊ノ花ヲ吹卷テチリミダシヨカシソシタラ此花ノチリミダ

レルニギレテカレモガシレヌト云テ 君ガオトマリナサルヤウニ

幽仙法師

おしづかふとくわきとくわきとくわきとくわきとくわきとくわきとくわきとくわき

○トテモるくニ候、ホトナラバ 君跡リ多ウ思ヒテオトテリナサレヤウニ
嘆イダガヨイソレニ君ヲオカヘシヤスノハ 花ノキコエヌノデハナイカ 花ノキ
コエヌノチヤワサオカヘシヤサウハナイワサテ 結會又 花ヨソチカタメニモウ
イコデハナイカ ソチカタメニモウイコチヤワサテ

仁和のみをぞみふおもく 海にさるる時ふゆはけ 漸
伊らんふおもく してかたのほひにによめ候

兼盛法師

ふるぞあしふる 海にさるる時ふおもく 下ろさるる
○ノコリオホウテ西別レヤス 拙信ガけ海ガ波ニソウテ流レルコレデハ
川トデハみガケシタトスエルデカナアラウ

かむまらものつらふめく ありき 日あやむいあむい
あめつらふめく ありき 日あやむいあむい
ありふさくらきとあて けしゆき

秋萩のあとにるよめく せどとてあはしてをく ことと思
○アノ萩ノ花ヲ此雨ニヌラシテシヲラカシテシマウノハキツウ 惜ウ思ヒ
スレバマダシヨリモキ 掲げぬニヌレテは 悔リナサルノニ西別レヤスガ
サナホサラ 内名抄ヲシイコチヤト 存ジラシマスワイノ アマヒトツアガ
リマセ ソノ内ニ雨モヤマセウワサテ

しよめりきりかし 兼盛法師

きしゆめりきりかし 兼盛法師

○ソノヤウニ別レテ惜ニテ拙者ヲ由縁切ニ思ウテトサレトハ今日マテ後ニ
モ存ゼナシダ サウシタキ程ノ由志ヲ存ゼナシタウキニ 拙者が身ハサ此秋
ノ時毎ノフルト云ヤウニ舊ウナウテモウラチノアカス物ナリニタマソツト
子ウ若イ内ニ其由志ヲ知ダラ別シテ大考マテガラリニア、妙入忘ナ

如後ニ如おやきみおもておがらりてお
色りる時ふらきぬ みる子

己かろきどしうねーくもあらうとてひよりあそぶきほふ何を思はし
○此のレキスハナゴリラシウハアトドサテクニア娘シイノカチナセニトヤヌニ
今夜ヨリサキイマダ由縁ニナラナシダウキハ 何チオナツカシウハ思ヒマセ
ウグ今夜始テ由縁ニナリシタバコソ由別レキナレ スレヤ別レキナゴ

リラニウ由ハルヤウニ近付ニナツタ下ガナボウカ娘シイノチヤウサテ

歌ーらび

よみんあしび

いうとーしあうく神のあうくおを君が形えとけみくぞゆく

○ノコリ多ウテ別レル神ノ後ハトニトモノヤウニ居ルガハ玉ヲバソコモ
トノ形見チヤト存ジテ即チ此袖ニウ、ニテサ糸ル

うだりぬく思ふ後よそやぢぬく神をかきりどをむ日ヤをいふ

○此別レラナボウカ戀チウ思ウテ此ヤウニ泣後ニヒツタリトヌレタハ袖ハ又
をとり日マデハ乾キハスマイナセニト云ニコレドニ悲チウ思ウーデヤニヨツテイツデ
モ忘レラヒイホドニイツヲ限リト云ーモナウ泣テヌラスデアラウニヨツテサ

かきくししおーハぬく思ふよそやぢぬく神をかきりどをむ日ヤをいふ

○此まゝ毎ハトテモフルホドナラバマツクラニナツテマツツヨウフツタガヨイ
ソシタラけぬライヒタテニシテみレテイク君ヲトメウニ

ふひくゆくもとを先む様をいつもいそとゆきよもち他

○ナボトメテモトコラズニシテみレテイク人ヲトメウニ楊花ヨ道ノヒメヤ
ウニチリウツシテドレガそギヤトアノ人ノ迷ウテエカヌホドチツテクレイ

ふがねふをそていー弁のちやあくおつひくく人のふ
れらるるをらふよふを

むきぶものまぶくふぶくふ乃井ねあうでもふふまぬく式

○想神いばヤウナ山ノシミツハ浅いおぢヤニヨツテ飲いウト思いウテスクヘバ
よカラ居いルまドデヂキニいほルニヨツテ思いウヤウニスクウテノマレ又飲いタヌ

物ギヤガテウドををリニサテくニア沙リ多イニアノ人ニ分レタヘカナ

そふらつわらうくふらうまふおをいつきいてわうい
らうとてはういそををいとといのい

トは常のみちハかゞゞくまかるともね先がりてもをじとど思いふ

○アヤヲスルニウシロアテタ所デハ端いノ方ガあ方ヘワカレルケレハ前いヘマ
ハシテムスブ取いテハ又イキアウおぢヤガををリニ今いイク道ハカウ別い
ニワカレテイクハ又ウノウチドいシテナリハ出い合いウいフサテ

古今和歌集卷第九巻

羈旅より

あらしを月をてまみり 安徳仲麻呂

天の糸ぬかりをてんれば去日ぬるみくまればふし月うと

○今カウエラツトハルカニえはせバアレク海ノウへ月ガデタア

アノ月ハなノ三笠山へ出タ月テアラウカイコト

此のあむふしはつらさをもちこしにわあふしは
はくしはつらさをもちこしにわあふしは
うでこがりききこをけあふし又つひまふりつらさを
ぬぐひてぬぐひききこをけあふし

とよむしらのうみへそあめおれ人うむのそねむ
しきうらむにわつし月のつとあふしあくはし
あきあふしをよあふしをよあふし

あまのあふれつらむるあふれあふれあふれあふれ
人のあふれつらむる 小野あかひのあふれ

こころは系八十崎うけくさねおぬし人おしうげあ海まの舟舟

○ユクサキハイクラ用ナク辰ニアマタアル嶋くうてイクベキ海上へ今
出船シタトエテヲをマア人ニシラシテクレイコリアアキへ海ッテイクアマノ

舟舟ヨ 船材結白けはえり

歌しらすぞ

あまびきくさる

みやと知てりよみのれ京づと門く風きしあらもかせや戸

○今日京ヲ出テハミカヲ系ヘキテアリ向ヒニエル山ハ麻岑山ヂヤガけ泉

川ノ川風ガキツウキイニアノカ世山ヨオレニキルモヲ一ツ借せ山

つよ秋云ニの白れりいうを麻岑山をみるもの
いふみきり。澤ハもあつたり

ほのぐとわうく舟浦乃船音小修がくれゆく船きぞ思ふ

○夜ノウスくトアケテクル時ニ海上カラ見えバアノ向ヒ十明石ノ浦ガ船音

デカクレテ又エヤウニナツテイクアノケニキヲ 妻ウヨソニテエテイク

け船中ノ心ハサテモく心ボツイ物ガナレイトヂヤ

けあハらう人のいさかきあめの人よ修がく

此あハ打聞ふおされくおくくさう芳物修よ小せ筆つのあとして

のきくろぞよ修くかき修しゆえそ海をぬがくしよあとして

あふハた向ともぬ修りてあわふつる船今昔物修を本

世にのきふおしり。船材のゆれ修くさうりきく修がくれ

とつよ修く修修く人ほし。修がきとハ海をへくさるあめ

かづれてる修と修りあも修も修り修を修あめてハ船音

ふるくれてゆえの浦修くゆえ海の沖よりいへん ○よ秋云修が
これゆく船ハ

おの修くゆゆく修の修くゆえあふハ船音にゆえの浦此 おの修くゆゆく修の修くゆえあふハ船音にゆえの浦此

おづあめうく^{ニスル}なと修く人むしうゆりゆきおいて

きまかり正はふハ修くさうりおふゆりゆりゆりふその

くのあふらふら修くゆゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

おのぢよあつかてかきつをいらいりきりもぞいれかし
らふとそて橋のそとまむしを よめい ちんぶ業ふりけ

かりなきつておまふーははしらいぶんてきめいをいれおまふー

○一きつておはニナジニダ妻ガアバ別てハルぐト来タハ孫ガサ
コロボソウおガナズセハル-

としーおあーそめいあひのあふの中おつるさみぞ
川のちりちりちりてみせいのしーおーあがけ
きりばんーいやはいのあちあちあひおまひのあひおまひ
くおまひいんあひおまひいんあひおまひいんあひおまひいんあひ
あひおまひいんあひおまひいんあひおまひいんあひおまひいんあひ

らひしそらふみまふあひのいびーとてあふあひあ人
おくーとあひびきささりおあきささりーとあーと
あふまいのほろいおあそびらとてあふいんあふまひのりけ
れをみまふあひいんあひいんあひいんあひいんあひいんあひいん
とておまひいんあひいんあひいんあひいんあひいんあひいんあひいん

たあやーおまふいんあひいんあひいんあひいんあひいんあひいんあひいん

○都ト云ヲ名ニツイテ居ルヲバ定メテ系ノヲヨウ知テ居ルデアラウ

ホトニドレヤモノトウ都鳥ヨコチガ思ウ入ハ ありや タテ井ルカトウヂヤ ありや

頭ちりけ
よみびりーらけ

きこゆへなぞおくらさほとてにねいしとぞおくらさほと

かひのまへはるるきよきついでとるる

みつね

おぼろの夜がをさニ草へおがフツテアルライク夜カをさおララウ

テハ子ハラウテハ子サノ葉ヲ枕ニシテモウハヤ何^ナモク子タ

よとありて夕さらけうさひん^{ツレテアツタ}りふとのふをさるる

あまみりついでふあゝ 藤原かひらを

夕ぼくよおがつらねきんばふ^{ツレテアツタ}くげうこのううハあけてこそそあ

○三 け二見ノ浦ノケキヲヌタイ抱チヤガヨヨハ宵月夜テダ新ガウス

ケレバハツキリトハスエヌニ 夜が明テカラトクトスヤウ

こもたうけみとのとふあふまわりはる時ふらまの川

このよき^{ツレテアツタ}の川乃ありらふありわをけぞのこ

きあつのでふみとのひま^{ツレテアツタ}かりしあ戸のうハ

らふらるるやうふ^{ツレテアツタ}ばよみさうきいきをとしひ

はき^{ツレテアツタ}ばをさるる あつら^{ツレテアツタ}れ葉お新た

のうくしあぬ^{ツレテアツタ}むつあふやどかむたの何あふあはきふまわり

○け方ドモハ今日ハ一日持ラシテアルイテコソク天ノ川ノ川系ヘキタワイ

日モクシタニサテヨイ^{ツレテアツタ}キタ天ノ川ナヤタナバタニ宿ラカラウ

みとけあをさるる^{ツレテアツタ}ぐよまつか^{ツレテアツタ}しんきをわらふらさるる

そのふゆりてよき

きのりをつね

一とせふてゆひききりん天までいやどかともまわじとどど

○イヤく天川テハ一年ニ一度ツ、心出ナサル星ト云ハ方ヲ待ツヤ

ニヨツテナかく外ノ者が宿カラウト云々トモ 借ス人モアルイトサ存ズル

朱雀院のな〜ふお〜 一ゆ〜 一ゆ〜 一ゆ〜 一ゆ〜

て〜えぬ

さ〜お〜

け〜びお〜も〜と〜ら〜ど〜ま〜ふ〜山〜お〜紫〜の〜や〜き〜神〜の〜ま〜ふ〜

○はなノ旅ハ伊能ユエヌサモ用エヌサナダソレユエ^五神ノ心ムカ

セニト存ジテ即チ山ノお紫ノ錦ヲソノ^三手向マスル

素性法師

ふじきふハフヅツの神しき〜べきふお紫にあら〜 祓やう包さむ

○祓へノ手向ニハ出家ノ身モハツツリノ袖ナリ尾切りキザンテ麻

ニシテ手向ルハスナレドモハヤウニ足ヲナお紫ノ綿ヲラ^一ツバイ足テ

内座ナサル、祓ナレハハヤウナキタイツツリノ切レナドハ心文ケハナ

サルニイ 心返シナサルデカナゴザラウ ソレユエサシヒカヘテ手向マセヌ

古歌和歌集を足十巻院

物名

うぐいす

右京と〜ゆきの船

むくく花は志づくふそなぢつうらひびとどのをきめぬくらひ

○オノガ心カラスキテ 花ノ末ニヌレナガラ ツライコトギヤ 乾カヌトエテ
タノヒタスラアヤウニナクノハドウ云フヤラ

ほそくぎん

くべきやどとさきさきぬめもやほらびてぬくもなれんともよむ

○郭公が待ッ妻ノ末ベキジセツガニテコヌカシテ マチカ子テナクアノ声
ガ入ラビツクリサセル 郭公はうへの恋のまに 餘材ヨラシ

うつつせき

なふるげんあ

浪のうりせみさばあをみだれりゆらりゆら神よもあまうむや

○浪ノウツ川ノ淵ヲスレハ 水玉ガトニトマコトノ玉ガサチルヤウナワイ

アノ玉ヲヒロウタナラ ホノ玉テハナイホドニ 袖ヘ入ウトシタナラ^五チキニ
消ルデアラウカ 餘材ヨラシ

かへし

壬午のたぎ

あまのやうりもぬれてあはつくまあやとれるむそまこつせむら

○半松ハ袖ヘ入ウトシタナラチキニキエルデアラウカト云ハシヤルガ テモ

神ヲオイテ外ニ玉ヲマウカ 神ヨリ外ニ玉ヲマウ物ハナイハサテ
スレヤキ松ノ御ヘツニテコレガサフレテゴザルト云テワシガ袖ヘウツサツ
ヤレワシモスヤウワサ おぼろり 餘材ヨラシ

うら

よみくしらむ

とうとぬは木

とうとのつら

おぼろをうらふアの本の伝くをが

みよしおのよしののぼふうびゆる味をうらぬのきとえつむ

○吉野ノぼへウキデル水ノ沫ヲ人ハ玉ガ出テキエルトスレデアラウカ

やまがきの木

よみんをうら

横井ノ秋云。山柿ハらひきくひつがうもぬる柿也。其は

濃柿とも。そや柿をりふ。又材小玉柿とも。あもをん。

秋ときぬ。今やまがきのきららぐもようめくならむ。凡れをさふ

○秋ガキタコレハ風ノをサニガキヲ蓋ガモウウケケヨクナラデカナアラウ

あふひうづ

かぐらりりあひるまは鏡小ねんといふ。ほししと思はざらばき

○コホドをさふガニナツタノヲドウニテウライトスズニ居ラウツラウスバイデハ

人先ゆゑ後ふあひのをさきくはらぐつ。きあやあひらさきむ

○人目ヲウケムユエニコレカラ後ニモレをフーガきウナツタナラウツケ

ハシラスニコチガウライノニナルデカナアラウ

くさくさ

傍心遍略

ちりぬきバほさのくさくさおろもをさひさしひもよとてよ

○花ハチウテシニハ後ニハ芥ニナツテシヤウテナシテモナイ物ヂヤニ

フヲエガテシセズニアハウナサテモア花ニヨウカナ

さくさく

ほく申

これハバツさうひもぞつづつをれをとあぶねむねつづつづのり
○オレハ花ト云ぬヲ今初始ノテサアタガをヲバ世らノ人ガアタナ相デ
ヤト云デガナルホドスレバアタナ相ト云キ色チヤワイノ 打ツテよし
をこねつー
ととけつ

夕暮をよよぬくとやさうのたより紫をよと糸をみる

○あう玉ニテツグトテヤラ蜘蛛カ女ヲセノ花モ葉モニナ系ヲ引テカク

秋夕風をそらむらつてさるむと今ぞおふとみなアアぬは

○女房花ヲアヤウト思ウテ秋ノあうヲ分テヌレクアルイテ今

日サ也ヤ山ヲドモカトモニナトホツテ 知ツタ

朱雀院のをこねつーはをせのゆふをみるア

とらつのもごとくはかーらふおきくをぬ

つらゆき

をぐらひみまをぬしぬく麻ねふらむ秋をさる人ぞあは

○小倉山ノ峯ノアタリヲアチコチアルイテ鳴麻ノコレデ候テキ

夕秋ノ寂ヲサ候年チヤカシル人ハナイ

まらかろ秋花 ととのつま

あきさちかろ秋をぬりふらふとふあのおりるまおれも色うりゆく

○野ノケシキヲミレバ冬カレノ相ナナイおるが近ウナウタワイ あんおイ

夕草ノ紫モ色ガカワテキタ 秋ハおろけーまおれをいつりさるゆ

秋のしら 秋をきぬおれあやふさくねどを考へ今をさし

○けなぐりをラズニスバをノ候ベキ木テモアルイケ厄をガサキマシタワイ
波せバナルジイ木モ本実ナレヤウニ 年ヨリシタ私かけ角モトウグ立身イ
タ又時折モアルカト新ヒマスル候デガリマス 竹材にのちの初候ヤノシ

志のぶくろ

きのどーりやい

ふもみつふふあししおさくくさくハやわひも河さぞ花ぞちりり

○近石ナ山ガもサニジヤウチウ嵐ク多里ノ花ハサ 咲テアルモナニ
ツイまテシマウワイ おすやのるお流ころし

やまー

年、あつゆき

○新公ハ家ノをノ中ヘトシデイタカラヌ アウコラテはトハサエケレド

ドウモ形ハスヤウガナイ

かしらじ

よみじとろじ

ふ秋は消暑堂の清浄樂の時ふ長くもてる 萩の枝を枯ッ
く枯くるをきんばくもふがぎくもて源氏物語もるくもり
さねがこもいもや。かしらきをぎくもて。あも二の白か。を本母かと
もきむと。萩の萩を萩イ。深ア。あのでふんはまよ。こ
まふよわく。改えつ。ものふ。のし。

○蝉カラスバヌギステ、ド木モトメテオイテ身ハドコヘカカテ、デイヌ

ルガ 以人間モテウドフニモデ 人ゴトニ死ヌレバ皆カラダス棺ノ
中へトテオケルカシシハハコトニテイヌヤラウヘガシヌヤウ
ニナウテシマウハサカナシイコトヤ

かきくおぐさ

ふうやぬ

うむむのまふはうおぐさまむうつふむもあうぬこらと

○をたイトモラスハ後ニテモんバ心ガ井ルト云ナレバ一後ニヌタガ

リデドウニテガサウグシヤウジニサへダタラヌヤウニ心チヤモラ

さがりのあけ

あうむこのと

花の毛いご一さうらとをまじるとかきくぐさ子孫ハとえけ

○むの色ヲ濃イハ名多一サカリテワウヌガリナレコトハ毎朝毎晩

ナニモくツタルワイ 名多一サカリチモラウヤウニ潔クモヨイコト

ふがくけ

あぢごもぬ

ふがくけハ沈まろかきくあけとたふらとむくおえろり

つかおけふらぬ

○よれまがくけハ苦草
つくしぬけハ草草なり

いのらとをいさをもあひふくしきれバ抽まびーらふたぐおぢのま

○せへン虫ハ、あう余ヤト思ウテおとニス尾おとニナリニクイハカチ

おぢヤニヨウテ 雑、美ニ思ウテカナレサウニウク

かきくおぐさ

かぢごのまのま

さよふけをねるばくけゆくおまかきくおぢあまをくおぢのやまれ

○夜がフケテモウ半分中モ多クク名ノ自ラ赤ク吹カセ秋ノ山ノ風ヨ

のちふらゝるゝ浪のきづく波をねまばいささたあつちをこえんむ
 ○舟ノカチヘアタツタ浪ノ多クケテキル葉ガ今ハ去ナレバ花ガチルト
 思ハレルト下モギヤアレラドウシテモトス又者ガアラウグ
 木のさたあつちのりかゝるむちゝんほきねてお守りし
 かゝさね
 あやのほき
 かのうふらゝるゝ浪のきづく波をねまばいささたあつちをこえんむ
 ○スレバアアリ辛崎ニ人カ立テ井ルガアコハ今テニ 傳信渡ッ
 テイツカラア、シテ居ルヤラ今マデニ渡ッタナラモ路ガアリウチ
 おナレバ 浪ノ多クバ後々モ妙ッナハナイワイ

伝信渡

浪のちかきかゝるゝ浪のきづく波をねまばいささたあつちをこえんむ
 ○浪ノオヨセテクルハニドセテ散テクルヤウニ元ガハヤウニオヨセテ
 後ヘチリテクル浪ノ花ハアリ沖ヘサイタをガ沖ノ方カラチツテクルヤウスギヤ
 サテ花ヲサカスハ去ノいゝ浪ノヨセテクルハ風ユエスシヤムノタメニ風
 ガ去ナリカハウテアノヤウニ花ヲサカスカニラヌ オ守後上りお守りし
 かゝさね
 ほき
 うをのちかきかゝるゝ浪のきづく波をねまばいささたあつちをこえんむ
 ○オレガ黒イ髪ガ色ガハツテニラガニオウタカニラヌ後ヘウタ
 新ヲスレバウムリヘ一ツ白ニ雪ガフツタ
 かゝさね

河一むきのふふききびんやむれいふきよとらむく時き

○山里ニ住テ居レバ ジャウヂウ雲ノハレル時モナイ サウナウテサヘ記

クウツタ山中ヂヤニ 何トセイトスーデハヤウニ雲サヘサル時モナイフ

かこ野

くぐみ糸

夏草のうハきくぬるものゆくかこのけきこがむのゆ

○拙者ガオハテウドウハニ夏ノ草ガハイハエビウテアルヤライヤラ

シヌ沼水ノヤウナモノデサ間ノ人ニモシラズ 立刃モエセバテウド又ツノ

沼水ノ流シテテ取ノナイヤウニサテくツカヌーカナオモシロウチイーカナ

うつしおま

源ちどろん

社くれむのうのふもハゆるむをむとらむらり

○憩休ノ木ハ秋ハ実ガナル物ヤガ月ノ中ナ桂ハ 秋ガキタトテ実ガナル

カ実ハナリハ甚タタ秋ハヨリサヤカナ光ヲ花ノヤウニ四方ヘチラスガ

リノイギヤモラツレニサレテ秋ノ月ヲ格別ニ賞覽スルハドウ云フゾイ

百和ま

よみ人ちんま

花びらふらびらし〜風ねきバクそびくまがしとりハ思ふ

○たト云むヲバドレモカレモタ けりオホイニチラシテニウタヤツナレバ

風ヲバオレハドレホドフツクニ思フグ タイテイ不思ニ思フーテハナイ

さきもけうし

まぶせいんち

まかそしけう〜う〜ひぢありせバ林々るハか〜ま

○去ノ草ノベツタリトフサガツテアル中ニをツテイク道ガナイナラバ 秋キ

夕乃が去りハスマイニ 暮ノ中ニモ乃ガアルテモハカヘルデアラウ

おき火
みやこけよりの

遠きづゝかゝるゝぬ海川おきひとほや庭ハあゝまむ

○流レテ知ル源サドチヤカシレヌ海川ナレバ 一ニテ底ノ源サハイカホド

アルカシヌガ モシ沖深イ事デ水ノ和ル時ガアツタラ底ノ源サモんテ
アラウカ

ちき紀
大にふり

のちき紀のおくれくあゝぬあれどあゝふハあゝぬこのことき

○後蔭ノオクシテハエタ苗デモ ムダニウテシマイハセズニ秋ハヤウハリ

実ウテおラアル田ノ縮ヤトヤ 及デ居ル スレヤ学問デモナニテ

モオウガケヤト云テ為マイヤウハナイグヤ ちき紀の伝説

ちき紀のあゝぬをいふてあゝぬがめどうきし時の
ちき紀のあゝぬをいふてあゝぬがめどうきし時の

伝説を齎

ちき紀のあゝぬをいふてあゝぬがめどうきし時の

○ズニ目ニニアクカト思ウテ 花ノタニト嘆テアル中ヲ分テイケバ

花ニ目が移ツテ コチ心ガサ花トイツレヨニアチコチトチウテイクヤウチ

コ、ロモチガスル

ちき紀のあゝぬをいふてあゝぬがめどうきし時の



